



### 定期総会を終えて

毎年六月初旬に開催してきている白門経友会定期総会は今年で二十五回目となり、次のようなプログラムで実施し審議事項は滞りなく了承されました。

なく承認されました。

講演会では、片桐正俊教授により、まず、ご自分の研究内容に関連し、今回のテーマを選んだ動機・背景についてお話しがあり、引き続き、豊富な資料をもとにアベノミクスと税財政改革に関して詳細に解説していただきました。

日時 平成二十七年六月十三日(土)  
午後二時 開会  
場所 中央大学 多摩キャンパス  
七号館 7104教室  
プログラム  
(一) 定期総会 午後二時～二時三十分  
① 平成二十六年度事業報告・決算報告  
② 平成二十七年度事業計画・予算案  
③ その他

### (二) 記念講演会

「アベノミクスと税財政改革」

講師 片桐 正俊 教授

総会では、冒頭で谷口洋志会長の挨拶、引き続き、佐藤副幹事長より昨年度の事業報告・決算報告ならびに今年度の事業計画・事業予算について説明があり異議



い申し上げます。

～ 平成27年度 定期総会および懇親会の開催風景 ～



多摩キャンパス 7号館 7104教室



ヒルトップ2F「ふらっと」



学は高校に比べると、学校との心の距離が遠い。私たちはそこを打開する策としても活動しているからです。

夢を語り合えたりする関係つてとても特別な関係ではないでしょうか。そんな世界観を作り続けているのです。

### 【たくさん行うほどたくさん享受する。】

一〇一〇年度卒 局 芳暁

#### 【たくさん得るためには?】

当たり前のことを言うようですが、たくさん行えば行うほど、たくさん得るようになるのが人生の真理です。人生を成功してきた偉人たちは決して天才ではないでしょう。現代の成功者たちも「を揃えて、「私は天才ではない。それ以上に努力した」という言葉を言っているように思えます。

しかし、気を付けなければならないことは、努力の方向性ではないでしょうか。「若いうちは遊んだらいい」なんて言葉が聞こえてくるようですが、決してそうではないと私は断言します。若いうちだからこそ、真剣にならなければならない。

「若さ」というのは特権です。それだけで語学も簡単に覚えられます。だから若いときこそ真剣に考え方、私はそう言って生活しています。

そして、夢企画に携わった学生には必ず将来のことを考えさせるようにしています。大

くさん起ります。まさにその出会い求めていた!というような驚きの連続です。人は、

そういうた出会いに感謝しなければならない在校生との出会いもそうですが、逆に、人の出会いに感謝をできないと人として生きられないなども思うほどです。

とても哲學的な内容になってしまいますが、例え、私が感じるのは、私が生まれ

きた確率から計算し、電車である人が横に

座っている確率、同じ大学に入る確率、同じ

クラスになる確率まで計算に加えるととて

しかし人はこの神秘的な出会いを普通のも

のとして見ます。それを知らず、考

えが低くてそうなのです。だから隨時このこと

を振り返らなければならぬし、たくさん学

んで分かって行なわなければならぬので

す。しかし人はこの神秘的な出会いを普通のも

のとして見ます。それを知らず、考

えが低くてそうなのです。だから隨時このこと

を振り返らなければならぬし、たくさん学

んで分かって行なわなければならぬので

す。現在、その中の2つが白門経友会のサポー

トの下に動き出しています。

人間じゃないものに生まれてきたなら、こ

んなこと感じたでしょうか。人間ほどコミュ

ニケーションの方法が豊かな生き物はない

かと思います。

地球上に住んでいる人間七十三億人が全て異

なるよう存在だという事実も、考えてみれば

とても興味深い事実です。

【最近の活動】



りません。夢を叶えるきっかけがないのです。在校生と話してみるとやりたいことがたくさん出てきます。その中には、大人ではなく学生が豊かな生き物はいない。それを刺激してあげれば彼らは動き出すのです。現在、その中の2つが白門経友会のサポートの下に動き出しています。

### 【経済学部のプロモーション映像】

ある学生がこんなことを話してくれました。「学校の紹介映像を見たんですが、もう

少し面白おかしくしたいと思うんです。高校

生が見て話題になるような。」

皆様はご存知でしょうか。中央大学の紹介

映像がインターネット上に上がっているの

を。ご存知ない方もいらっしゃるかと存じま

すが、学生にとっては何か気になつたらイン

ターネットで調べて、インターネットの動画

を見て楽しむのが当たり前となつてい

ます。そんな中央大学の学生の一人が、中央

入ったのも、佐藤文博先生のゼミに入っています。私がこうして白門経友会になかつたらなかつたことですし、はたまた佐藤先生とフェイスブックで友達になつていても、とても神秘的に作られているのだと感

じるのです。

こうやって人間と人間との関係というの

かつたら実現しなかつたことでした。

この活動をしていると神秘的な出会いがた

くさん起ります。まさにその出会い求めて

いた!というような驚きの連続です。人は、

いた!というような驚きの連続です。人は、

いた!というような驚きの連続です。人は、

いた!というような驚きの連続です。人は、

いた!というような驚きの連続です。人は、

いというのです。私はこの話を聞いたとき、こんな大学を愛している学生がいるのかと正直驚き、私が学生のとき抱いていた大学への思いを反省しました。

見聞記

彼が言うには、アメリカでは学生主導で制作した大学の紹介映像が多くあり、いずれもとても面白い内容になつていてのこと。私も言わせて拝見したイエール大学の映像は、学生がミュージカル形式で大学のことを次々紹介していく、とても学生で作つたとは思えないクオリティでした。

【中央大学の芸術家を束ねる】

【中央大学の芸術家を束ねる】

中央大学のOBOGには名だたる芸術家がたくさんいらっしゃるのでご存知でしよう。この企画の進捗状況は随時、この会報でお知らせできればと考えております。



「モナリザ」は存在しなかつたかもしません。  
らつて肖像画を描いていなかつたとしたら、  
しかし「考えの間」というある詩人の詩を  
読むと、次のような内容が出てきます。

可能性がある在学生がいるはずです。この企画はそちらに主眼を置いています。

詩人はひたすら詩ばかりを考え  
経済家はひたすら経済ばかりを考えるなら  
この世は楽園になりそうだが、實際には

詩と経済の間を考え

たた組く  
紙二枚が

もしかすると、この詩は芸術とお金の間で見事に二重の運営を行つてゐる。

現実的に苦しむ芸術家の立場をよく弁してくれているのかもしれません。

芸術家は常に貧しくあるべきで、霞を食つて生きろという法はありません。だから、数

多くの芸術家がお金を追求していることは事実である。しかし、一方で、アーティストたちの多くは、自分の才能や表現に対する尊重を失う恐れがある。

美です。しかし、芸術はその味を失ってはならぬ、命の意味を表すべきだとある芸術家は

言いました。したがつて、お金が割り込んで

芸術家の心を潤滑させ、一次的であるべき才金が芸術をする最も重要な目的になつては、

芸術の真の味を失うことになります。眞の価値を回復する芸術をすれば、その画質はお金

に換算することができないだろうし、世の中

の富は当然ついてくるだろうと、芸術家のはしきれとして考えています。（参考・芸術と

# お金の間、芸術の真の味



イエール大学

## 中央大学戦後七〇年に思う —『百年史』をひもとく

今年の夏は戦後七〇年の総理大臣談話が議論を呼び、戦後七〇年が改めてクローズアップされた。中央大学でも七月八日に戦後七〇年記念講演会「戦中・戦後の中央大学」(講演者・菅原彬州法学部名誉教授)が開催された。さらに、一〇月二一日(水)には、戦後七〇年記念シンポジウム「戦争と中央大学」(一三時二〇分より、八号館八三〇七教室にて)が予定されている。

ことさら周年にとらわれる必要はないが、七〇年は人でいうと「古稀」にあたり中央大学では教員の定年退職の年でもある。つまり、今年度末をもって教員はすべて戦後産まれということになるわけだ。そこで、『中央大学百年史』(以下『百年史』)や『中央大学経済学部一〇〇年の歩み』(以下『歩み』)をひもとき、七〇年前の中大に思いをはせたい。

一九三七年に日中戦争が開始され、一九四一年にアジア・太平洋戦争へと戦線が拡大していく中で、総力戦体制が大学にまで及ぶ。一九四三年にはついに「学徒出陣」にまで至る。東京と近在の七七校の学徒が一〇月二一日に、雨の降りしきる神宮外苑競技場を分列行進する壮行

会の映像は総力戦体制の悲劇を伝える一コマとしてしばしば取り上げられている。

その頃勤労動員中の予科学生(法)であつた藤江栄輔氏は、昭和一九年一二月、東京地方に珍しく大雪が降つたとき、夜明けの雪道を工場の仕事が終わって家に帰る途中、「そういう時間の中で、突然噴き出したのは、あの『惜別の歌』の第三節、「悲しむなけれわが友よ」。あのメロディーが突然噴き出した」。そして一日でそれに曲を付けたのが「惜別の歌」だという(Hakumon らゅうおう)二〇一〇年一二五周年記念号p.18)。その歌は当時の学生達によって共感をもつて受け入れられ、壮行会でよく歌われたという。その伝統を受け継ぎ、今日でも中央大学では卒業式で「惜別の歌」が歌われている。

さて、一九四五年二月二五日の東京大空襲などで東京は多くの建物が破壊され焼け野原になつたと言われるが、「駿河台地域の建物と中央大学校舎は残存しニコライ堂を含む神田の景観は保たれ、中央大学の戦後の復興に有利な条件が与えられていた」(『百年史』(下)p.153)。

その年、九月一一日に授業を再開。学徒動員で出征したが内地にとどまつていた復員学生、通年勤労動員で軍需工場に行っていた学生が、続々と復学してきた。た

;(中略);懐かしい教室は元のままであつた。黒ずんだ幅の狭い学生机と背凭れのない腰掛けが並んだ教室に裸電球が下がつていた。知に飢えた学生はむさぼるように講義を聴き、焼け残つた書物を読んだ。暖房器具は兵器を製造するために供出されて、教室には放熱器がなかつた。冬になると教員も学生も外套を着たまま講義し、聽講した。(同書pp.155-

6)

「しかし期待された授業は休講が多く、とうてい満足と言える状態ではなかつた。当時は物資が極端に不足していた。當時は物資が極端に不足していた。まずは飢えをしのぐための買い出しに奔走せざるをえなかつた。また東京のほとんどが戦災で灰燼に帰したため住宅難で、疎開先から帰郷できない教員も少なかつた。」(『歩み』p.158)

本会の元会長の小川明夫氏も、戦中戦後について次のように記している。「学業も口クにしないまま学部の二年になつた時、徴兵延期がなくなり軍隊へ入隊しましたが、一年九ヶ月の軍隊生活を経て敗戦。復員、復学ということで昭和二十一年十月に大学へ戻つてきました。交通事情、食糧事情は想像もできないでしよう。米は配給、これだけでは足りないので農家へ買出し、満員電車の中、折角農家で

されたりと、よくぞ過ごしてきたものと、時々思い出し、ぞつと、するのです。かくして昭和二十二年九月に卒業し、生命保険会社に就職することができました。」(『歩み』p.230)

そうした混乱の中でも、一九四五年九月には卒業証書交付がなされ、翌年四月には入学試験が実施された。

一九四九年に私立学校法が制定され、中央大学は新制大学としての歩みを始める。

日々の生活だけでも大変であった戦後の混乱期にあつても学業を忘れないかった学生たち、そしてその期待に応えようとした教職員たちの努力のおかげで、今日まで中央大学は一三〇年(経済学部は一一〇年)途切れることなく続いてきた。そのことを私たちはしつかり心に刻み、これからも平和のために貢献する大学であり続けるよう努力していきたい。

(濱岡 剛 常任幹事)

2015年10月12日 第59号

発行 白門経友会常任幹事会  
編集 白門経友会編集委員会  
編集長 鈴木秀男  
〒192-0393  
東京都八王子市東中野742-1  
中央大学経済学部内  
URL: www.wg-keiyukai.com  
Fax: 042-673-3425